

国際観風協会 設立のごあいさつ

企業組合 HUCA・C 代表理事 染川明義

このほど、日本で初めて、国際観風協会を設立いたしました。私は、ボルボックスアート団というアートによるまちおこしをする団体をつくり、大阪市内を走る唯一の路面電車・通称チン電車（阪堺電軌軌道）に乗って、大阪の最も下町らしい町をあてどもなくぶらぶら歩き、長屋を改装したお店なんかを発見しながらマップまでつくってしまいました。マップづくりをきっかけに沿線で頑張っているお店の人たちとも仲良くなり、Koids café（東天下茶屋）にて国際観風協会設立総会を開き、さらにこのほど、事務局を太成学院大学 人間学部 猪池 雅憲先生の研究室に置くこととなりました。

「観風」、かんふうと読みますが、聞きなれない言葉だと思うのです。国の光を観るより土地の風を感じて歩こう、ということなのです。これは私の造語ではなく、広辞苑で観光と引くと観風という言葉が出てきます。中国の方に聞いたのですが、中国には観光と観風の2つの言葉があり、寺社仏閣など立派なところを観るのが観光で、田舎を観て歩くのが観風なのだそうです。

風ということについて少し触れますと、神様の中に方神様がおられ、その使いとして鳥の形をした神様が方々に行って、方神の意を伝え、方々の風ができていくのだそうです。たとえば、風土とか、風向とか、風雅、風情などが生まれ、地方ごとの特色が生まれていった。観風の旅というのは、そういうものを感じに行くということなのです。なにか取り立てて観るべきものもないと思われるところでも、十分その町の風情を楽しむことができるのです。観光旅行ではなく、観風の旅のすすめです。風を感じてぶらぶら歩く、このぶらぶら歩きのことをストロールとも言い、あてどもなく目的もなくぶらぶら歩く。そういう旅をすすめたと思っています。

ヨーロッパではペンションという安宿がありますが、もともと年金という意味で、高齢者の所得づくりのために、駅のインフォメーションセンターとともに整備されたようです。どんな町に行っても安く泊まれるところがあり、観風の旅を楽しむことができます。

日本では観風の旅のインフラがほとんどなく、1000円で泊まれるようなところは、ドヤ街といわれる地域にしかありません。今、ドヤ街は、外国人個人旅行者たちが年間何十万泊もするところとなっています。もっと日本各地に安宿があれば、1000万人、2000万人の海外宿泊客が来るようになることでしょう。

近年、日本人の年金暮らしの人の引きこもりが問題となっていますが、観風の旅のインフラは、日本人の年金暮らしの人たちにも、大変喜ばれるものだと思います。

国際観風協会では、今後、学会を設立し、全国規模で風を感じて旅することができるような観風の旅の宿やネット予約システムなどのインフラ整備についての様々な提言もしていきたいと考えております。今後、フォーラムなどの催しも企画して、政策立案や提言などしていければと考えております。その節にはぜひご参加いただきますよう、よろしくお願い申し上げます。